

スーパー読者の  
経営力が選ぶ

# あの商品この技術 25

圃場作り・土作りの思想から機械利用の知恵。紙数の制約から機械選びのすべてを  
紹介し切れないのが残念だ。ここでは、盛川氏の経営観と機械技術の一端を紹介し  
て、府県の水田転作を本作化するためのヒントにしたい。



岩手県花巻市  
(有)盛川農場

## 盛川周祐氏

【経営データ】

■個人データ/労働力は盛川周祐氏(54歳)と妻の裕子さん(50歳)、長男の祐君(19歳)の3人。長女の風子さん(22歳)は岩手大農学部学生。友人をアルバイトに連れてくるリクルーターでもある。■経営概要/経営耕地46ha。水稲9.6ha、小麦25ha、大豆11ha、ソバ1ha。ジャガイモの契約栽培にも取り組もうと計画している。

※■の数字は資料請求番号です

右の写真は麦収穫二週目の緑肥の発芽状況。7月中旬の麦収穫後、すぐに堆肥を撒き、作業幅310cm・7本爪のブラソイラDX(スガノ61・右下)で約25cmの深さで刈り株を土壌混和。その後、ブロードキャスタで緑肥を播き、250cm幅のパーチカルハロー(スガノ62・左下)で浅く攪拌と鎮圧してクズ大豆を播く。7月末にはもう大豆が芽を出していた。それを9月の中旬に20インチのプラウで緑肥を鋤込み、パーチカルハローでの碎土・鎮圧して麦の播種床を準備する。

盛川氏は、寒冷積雪地での麦ワラの腐食を促進させるための基本技術として、北海道やヨーロッパの畑作から学んでいる。排水を改善するモミガラ充填や、大きな明渠作りも組み合わせられている。



減反が始まって36年。果たして府県の水田地域に畑作の土壌管理や機械化の考え方は定着したか? 多くの場合、水の恵みを前提とした稲作の技術観から脱してはいない。

盛川周祐氏は違う。北海道の優れた畑作農家に学んだ氏は、従来の水田農業の枠を越え、畑作農業の経営観と技術を自分のものとしている。それが水稲の作柄にも良い結果をもたらしている。

盛川氏の経営耕地は46ha。地目は水田であるが、イネの作付けは9・6ha(うち乾直70a、湛直60a)。小麦25ha、大豆11ha、ソバ1ha、それに今年試験的に作ったジャガイモが0・3haと畑作が主体の経営だ。

基本は畑作りと土作り。それに工程管理思想に裏付けられた緻密な作業の組み立てだ。収穫は最後の作業ではなく、次作の始まりとなっている。7月末、収穫2週目の麦跡にはクズ大豆の緑肥が芽を出していた。一連の作業は雪が降る前に麦ワラの腐食を進めるため。それが寒冷積雪地の畑作の原則だ。その丁寧で緻



前述の麦播種床準備の後は、デンマーク製のドリルシードFIONA (D-784・左)で播種。250cmの作業幅で条間11.9cmで21条に播く。ディスクで切込みを入れそこに播種するタイプで高速でも安定した播種精度を持ち、耐久性の高さも盛川さんは評価する。

右の写真はスプリングタイムの中耕除草機。古い北海道のタイプ。土壌が畑地化してあれば高速で質の高い中耕除草ができる。以前に大湯村の農家から中古で購入。盛川氏はそれにタイヤの跡消し用の爪を追加している。トラクタのタイヤがロックアップ用であることも注目。



800ℓ、16m片ブームのブームスプレーヤ (BSM830SLT・丸山<sup>67</sup>)。防除は適期に素早く処理するのが基本。そのために、作物によっては圃場の両端あるいは防除畦を作る。府県の農家には狭い圃場を最大限に使おうとして作業機類の作業能率を落としている人も多い。



90psのジョンディア6210。トラクタはこの他、ホイールがMFの66ps (MF365)、二駆の62ps (MF165) それに三菱の46馬力の4台。さらに、クローラトラクタが110psと75ps (三菱)の2台、計6台。すべて中古だが、これで作業条件や作業の種類に合わせて質の高い作業を適期に効率的にこなせる。これも府県の一般的な農家の常識とは大きく異なる。



高速道路の融雪材の搬送用に買ったタンクを5千円で買った。防除用の車を運ぶ手段としてだ。下はパレットになっておりフォークが使え、タンクの下部には排出用のコックもついている。河合肥料から液肥を買うと同じ容器で送られてくるので、それも使っている。



初搬送用の布製コンテナ (秋太郎・三洋<sup>68</sup>) を搬送用としてではなく、粒状の資材や種子の積替え用の手段として使っている。排出量調整ができるので使い勝手が良いのだそうだ



麦、大豆、ソバなどの水分計測に使う穀類水分計 (PM-830-2・ケット<sup>69</sup>)。約10万円する。

右の写真は上から、大型モミガラ充填機 (モミサプロ-SPF 12・スガノ)、溝掘機 (PD251・スガノ<sup>63</sup>)、12インチ7連のレーザーブラウ (LC PQY127H・スガノ<sup>64</sup>)、18-20インチ×2連のリバーシブルブラウ (RQY202C・スガノ<sup>65</sup>)。

この大型モミサプロ-は、110psのクローラトラクタに直装して使っている特注品の簡易暗渠施工機。振動式のナイフで土に幅4cmの切れ目を入れ、そこに表層から40~50cmの深さまでモミガラなどの疎水材を充填していく。この施工で、モミガラ層に地中の水が集まり、土壌の乾燥が進み、排水も容易になる。

溝掘機PD251は、50cmのディスクで土に切込みを入れ、ブラウ状の掘削部を持ち、深さ25cm、幅が地表で25cm、溝部で18cmという大きな明渠を掘ることができる。また、バックスコップで掘り上げた土をならしていく。それが4~6kmの速度で作業できるというのも魅力だ。

下の2点のブラウは、12インチ×7連のレーザーブラウと18-20インチ×2連のリバーシブルブラウ。盛川さんは18-20インチの3連リバーシブルも使っている。ボトムブラウは農業の基本となる作業機であり、過度に除草剤に依存しないための必須の条件だと盛川氏は話す。畑作だけでなく、同氏のイネの姿を見てもブラウの価値は疑えない。

写真は無いが、盛川氏はこれ以外に作業幅4mの直装式レーザーレベラ (スガノ<sup>66</sup>) を所有し、レーザーブラウも使って段差のある二枚の田を一枚にまとめたもしている。



密・計画的な土壌管理が畑作の基本なのだ。そんな「工程管理」の徹底が単なる省力ではなく質の高い畑作を可能にしている。

6台のトラクタから工夫されたライスセンターと呼ぶべき乾燥調製施設。営農レベルで使用する基盤整備用機械から土作業機をはじめとする多様な機械設備。その装備は並ではない。しかし、土関係の作業機を除けばトラクタもコンバインもほとんどが中古品。高い整備技能とともに部品表をチェックして消耗部品を常備する。その知識と技術が投資額を最小限に留めている。

(昆吉則)